

三尺角拾遺

(木精)

泉鏡花

青空文庫

「あなた、冷えやしませんか。」

お柳は暗夜の中に悄然と立つて、池に臨むで、其の肩を並べたのである。工學士は、井桁に組んだ材木の下なる端へ、窮屈に腰を懸けたが、口元に近々と吸つた巻煙草が燃えて、其若々しい横顔と帽子の鍰廣な裏とを照らした。

お柳は男の背に手をのせて、弱いものいひながら遠慮氣なく、「あら、しつとりしてるわ、夜露が酷いんだよ。直にそんなものに腰を掛けて、あなた冷いでせう。眞とに養生深い方が、其に御病氣舉句だといふし、悪いわねえ。」

と言つて、そつと壓へるやうにして、

「何なんともありはしませんか、又またぶり返かへすと不可いけませんわ、金きんさん

」
其それでも、ものをいはなかつた。

「真ほんとに毒どくですよ、冷ひえると悪わるいから立たつていらつしやい、立たつていらつしやいよ。其その方ほうが増ましですよ。」

といひかけて、あどけない聲こゑで幽かすかに笑わらつた。

「ほゝゝゝ、遠とほい處ところを引張ひっぱつて來きて、草臥くたびれたでせう。濟すみませんねえ。あなたも厭いやだといふし、其それに私わたしも、そりや様やう子すを知しつて居ゐて、一いつ所しょに苦勞くらうをして呉くれたからツたつても、※ねえさんには極きまりが悪わるくツて、内うちへお連れ申まをすわけには行ゆかないしき。我わが儘まばかり、お寢よつて在いらつしやつたのを、こんな處ところまで連つれて來きて置おい

て、坐すわつてお休やすみなさることさへ出で来きないんだよ。」

お柳りゅうはいひかけて涙なみだぐんだやうだつたが、しばらくすると、

「さあ、これでもお敷しきなさい、些ちつと少とはたしになりますよ。さあ

、

擦すりよ寄よつた氣け勢はひである。

「袖そでか、」

「お厭いや？」

「そんな事ことを、しなくツても可いい。」

「可よかありませんよ、冷ひえるもの。」

「可いいよ。」

「あれ、情じやうこほが強いねえ、さあ、えゝ、ま、瘦やせてる癖くせに。」と向むか

うへ突ついた、男をとこの身みが浮ういた下したへ、片袖かたそでを敷しかせると、まくれた白しろい腕うでを、膝ひざに縋すがつて、お柳りゅうは吻ほつと呼吸いき。

男をとこはぢつとして動うごかず、二人ふたりともしばらく黙だんまり然り。

やがてお柳りゅうの手てがしなやかに曲まがつて、男をとこの手てに觸ふれると、胸むねのあたりもに持もつて居ゐた巻煙草まきたばこは、心こころするともなく、放はなれて、婦人をんなに渡わたつた。

「もう私わたしは死ぬ處ところだつたの。又また笑わらふでせうけれども、七日なぬかばかり何なんにも鹽しほツ氣けのものは頂いたゞかないんですもの、斯かうやつてお目めに懸かりたいと思おもつて、煙草たばこも斷たつて居ゐたんですよ。何なんだつて一旦いつたん汚けがした身からだ体たいですから、そりやおつしやらないでも、私わたしの方ほうで氣きが怯ひけます。其それにあなあなたも舊もとと違ちがつて、今いまのやうな御身おみぶん分ぶんでせう、所し

よせんかな
詮叶はないと断めても、断められないもんですから、あなた笑
つちや厭ですよ。」

「といひ淀んで一寸男の顔。」

「断めのつくやうに、断めさして下さいツて、お願ひ申した、あ
の、お返事を、夜の目も寝ないで待ツてますと、前刻下すつたの
が、あれ……ね。」

深川の此の木場の材木に葉が繁つたら、夫婦になつて遣
るツておつしやつたのね。何うしたつて出来さうもないことが出
來たのは、私の念が届いたんですよ。あなた、こんなに思ふもの、
其位なことはありませんよ。」

と猶しめやかに、

「ですから、最^も大^{おほ}威^ゐ張^{はり}。其^{それ}でなくツてはお聲^{こゑ}だつて聞^きくこと
の出來^{でき}ないので、押^お懸^{しか}けて行^いつて、無^む理^りに其^その材^{ざい}木^{もく}に葉^はの繁^{しげ}
た處^{ところ}をお目^めに懸^かけようと思^{おも}つて連^つ出^れして來^きたんです。

あなた分^{わか}つたでせう、今^{いま}あの木^こ挽^び小^ぎ屋^やの前^{まへ}を通^{とほ}つて見^みたでせう。
疑^{うたが}ふもんぢやありませんよ。人^{ひと}の思^{おも}ひ
いつてお疑^{うたが}な^なさる^るのは、そりや、あなたが邪^{じや}慳^{けん}だから、邪^{じや}

慳^{けん}な方^{かた}にや分^{わか}りません。」

又^{また}黙^まつて俯^{うつ}向^むいた、しばらくすると顔^{かほ}を上^あげて斜^なめに卷^ま煙^{きた}草^{ばこ}
を差^さ寄^{しよ}せて、

「あい。」

「……………」

「さあ、」

「……………」

「邪慳じゃけんだねえ。」

「……………」

「えゝ！、要いらなきや止よせ。」

といふが疾はやいか、ケンドンに投はふり出した、巻煙草まきたばこの火ひは、ツツと橢圓形だるんけいに長ながく中空なかぞらに流星りうせいの如ごとき尾をを引ひいたが、※とぼつと火花ひばなが散ちつて、蒼あをくして黒くろき水みづの上うへへ亂みだれて落おちた。

屹きつと見みて、

「お柳りゅう、」

「え、」

「およそ世よの中なかにお前位まへらゐなことを、私わたしにするものはない。」

と重々おもくしく且かつ沈しづんだ調子てうしで、男をとこは肅しゆくぜん然ぜんとしていつた。

「女房にようぼうですから、」

と立派りつぱに言いひ放はなち、お柳りうは忽たちまち震ふるひつくやうに、岸破がばと男をとこの膝ひざに頬ほをつけたが、消入きえいりさうな風采とりなりで、

「そして同年紀おなじとしだもの。」

男をとこは其頸そのなじを抱だかうとしたが、フト目めを反そらす水みづの面おも、一てん點んの火ひは未まだ消きえないで残のこつて居ゐたので。驚おどろいて、じつと見みれば、お柳りう

が投げた卷煙草まきたばこの其それではなく、靄もやか、霧きりか、朦朧もうろうとした、灰は

色いろの溜池ためいけに、色いろも稍濃やゝこく、筏いかだが見みえて、天窓あたまの圓まるい小ちひな形かたちが

一個ひとつ乗のつて蹲しゃがむで居ゐたが、煙管きせるを脚くはへたらうと思おもはれる、火ひの光ひかり

が、ぽツちり。

又水の上を歩行いて來たものがある。が船に居るでもなく、裾が水について居るでもない。脊高く、霧と同鼠の薄い法衣のやうなもの絡つて、向の岸からひらくくと。

見る間に水を離れて、すれ違つて、背後なる木納屋に立てかけた數百本の材木の中に消えた、トタンに認めたのは、緑青で塗つたやうな面、目の光る、口の尖つた、手足は枯木のやうな異人であつた。

「お柳。」と呼ぼうとしたけれども、工學士は餘りのことに聲が出なくツて瞳を据ゑた。

爾時何事とも知れず仄かにあかりがさし、池を隔てた、堤

防ての上うへの、松まつと松まつとの間あひだに、すつと立たつたのが婦人をんなの形かたち、ト思おもふ
と細ほそ長ながい手てを出だし、此方こなたの岸きしを氣けだるげに指さし招まねく。

學士がくしが堪たまりかねて立たたうとする足あしもと許もとに、船ふねが横よこざまに、ひ

たたとついで居ゐた、爪つまさき先のの乗のるほどの處ところにあつたのを、霧きりが深ふかい

所せ爲ゐで知しらなかつたのであらう、單たゞそればかりでない。

船ふねの胴どうの室まに嬰兒あかごが一人ひとり、黄きいろ色いろい裏うらをつけた、紅くれなゐの四よツ身みを着き

たのがすべにすべつて、彼かの婦人をんなの招まねくにつれて、船ふねごと引ひきつけらるゝ

やうに、水みづの上うへをするなくと斜なめに行ゆく。

其道筋そのみちすぢに、夥おびたゞしく沈しづめたる材木ざいもくは、恰あたかも手てを以もて搔かき退のけ

る如ごとくに、算さんを亂みだして颯さつと左さ右うに分わかれたのである。

其それが向むかう岸ぎしへ着ついたと思おもふと、四邊あたりまた濛もう々く、空そらの色いろが少すこし

赤味あかみを帯おびて、殊ことに黒くろずんだ水面すゐめんに、五にん六はひ人の氣勢けはひがする、囁ささやくのが聞きこえた。

「お柳りゅう、」と思おもはず抱だき占しめた時ときは、淺黄あさぎの手絡てがらと、雪ゆきなす頸うなじが、鮮あざやかに、狭霧さぎりの中なかに描ゑがかれたが、見みるく、色いろがあせて、薄うすくなつて、ぼんやりして、一體いつたいに墨すみのやうになつて、やがて、幻まぼろしは手てにも留とまらず。

放はなして退すきると、別べつに堀際へいぎはに、犇ひしく々と材木ざいもくの筋すぢが立たつて並ならぶ中なかに、隴おぼろ々くともものこそあれ、學士がくしは自分じぶんの影かげだらうと思おもつたが、月つきは無なし、且かつ我わが足あしは地つちに釘くぎづけになつてゐるのにも係かゝらず、影法師かげぼうしは、薄うすくなり、濃こくなり、濃こくなり、薄うすくなり、ふらく動うごくから我われにもあらず、

「お柳、」

おも思はず又、

「お柳、」

といつてすたくと十間ばかりあとを追つた。

「待て。」

あでやかな顔は目前に歴々と見えて、ニツと笑ふ涼い目の、
うるんだ露も手に取るばかり、手を取らうする、と何にもない。
掌に障つたのは寒い旭の光線で、夜はほの／＼と明けたの
であつた。

學士は昨夜、礫川なる其邸で、確に寢床に入つたことを知
つて、あとは恰も夢のやう。今を現とも覺えず。唯見れば池のふ

ちなる濡れ土を、五六寸離れて立つ霧の中に、唱名の聲、鈴
 の音、深川木場のお柳が※の門に紛れはない。然も面を打つ一
 脈の線香の香に、學士はハツと我に返つた。何も彼も忘れ果
 てて、狂氣の如く、其家を音信れて聞くと、お柳は丁ど爾時
 ……。
 あはれ、草木も、婦人も、靈魂に姿があるのか。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 第四卷」岩波書店

1941（昭和16）年3月15日第1刷発行

1986（昭和61）年12月3日第3刷発行

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年11月11日作成

2011年3月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

三尺角拾遺

(木精)

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 泉鏡花

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>